

# 漆塗り職人—佐藤則武【後編】

江戸時代の顔料の成分分析から、使われなくなった技法・用語の研究まで、まるで研究者のようなアプローチで、「漆塗り」の道を追究する職人・佐藤則武に、漆塗り修復への思いと後進の育成について語ってもらった。



現在の弟子の一人、鈴木晶子さん。親方同様、細かい部分の塗りもしっかりできる頼もしい存在だ。



透き塀の彫刻は取り外して修復される

## 探し続けた「幻の技法」

陽明門、唐門、そして本殿の透き塀…。日光の社寺群の中でも特に多くの人の目に触れる建物の漆塗り修復全体を取り仕切る職人・佐藤則武。その「かつての技法や使われた顔料の再現」へのこだわりの強さは、職人という枠を超え、まるで化学者や考古学者のそれを思わせる。

「寛永の造営帳に『シンヌリ(真塗り)』っていう言葉が載ってるんですよ。でも今は使われてなくて、『ツヤのない黒の塗装』らしいけど誰も見たことがないから具体的にはわからない。長年謎だったんだけど、今回の修復で見つかったんです」

寛永十三年に塗られた部分で、その上に別の

部材が取り付けられて外気に触れていなかったもので、その色合いが「シンヌリ」だと判明した。「最高の出会いですね。テレビの取材で『初恋の人に会ったみたい』って冗談で言ったらそのまま放送されて、カミさんに怒られました(笑)。探し続けたものにやっと出会えた感じでした」

また、赤の顔料の一種に「弁柄」というものがある。アルファベットでは「bengala」と書き、江戸時代にインドのベンガル地方で採れたものが伝来したことからこの名で呼ばれる。「だいたい元禄のころから使われてるらしいんですが、天然のものはザラザラして粗いから使いづらくて、日光の修復でもいつの間にか人工の使いやすいものに切り替わってた。で、今でもわずかに作られてる天然製の弁柄を使ってみたら、やっぱりそちらの方が江戸時代のものに近い色合いが出るんですよ。漆を漉す時に紙が破れたりして扱いはいいけど、当時これを使ってたのならこっちを採用したいな、と」

## かつての用語、道具を「保護」する

「いろんな道具にしても、今ホームセンターに行けばもっと便利な工具がいくらでもある。でもそれをやっちゃうと、この道具を作る人がいなくなると、言葉だけが残る。どんな道具なのか、使い方もわからなくなる。だから、めん



さとう・のりたけ◎1949(昭和24)年、山形県大蔵村生まれ。美術好きが高じ、専門学校で塗装を学んだあと内装工事の会社に入社。その後「後になって振り返れる仕事をしたい」一心で(公財)日光社寺文化財保存会に入り、ほぼ独学で漆塗りを習得した。現在は日光の社寺修復事業全体の施工管理や研究も手がける。

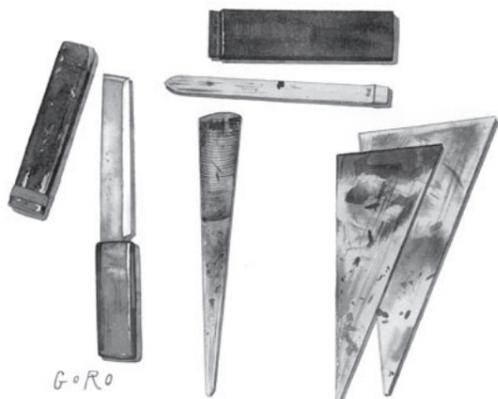
## 「漆塗りの修復は、昔の人のメッセージをそのまま現代に伝える、ということ」

世の修復に当たった職人が受け取ったメッセージ、今の時代の人が感じるもの、みんな違うでしょうが、それでもいい。自分たちにできるのは過去の職人のメッセージをそのまま伝えることであって、それをどう受け取るかは見た人しだいなので」

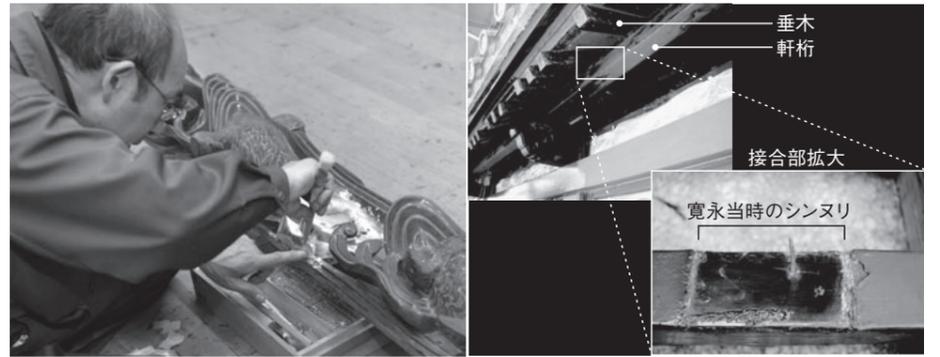
「個人的に、一番手がけたいのは本殿(二〇一三年現在、未修復)。漆としては陽明門よりグレー

ドが上なんです。何とか定年前に…と思ってたんですけど、定年延長になったから、一応かわることができそうです。やっぱりメインになる建物だから、いろんなものが残ってるはずで、今から楽しみですね」

まるで少年のように目を輝かせる佐藤の談話は、根っからの職人だからこその発することができる熱い言葉で締めくくられた。



手に馴染むよう自らつくる木ベラ



右/解体しないと見えない垂木と軒桁の接合部に寛永13年当時のままの「シヌリ」が残っていた。  
左/下地に金箔を押し、その上に絵具で着色する。色が落ちててもその下が金箔なら見栄えがよいからだ。

### 佐藤流、効果的な後進の育成法

師匠がいない佐藤にとっては、後進を育てることも試行錯誤しながらのことだった。

「施工管理する立場になって、毎年講師みたいなことをやるようになったんだけど、その時

どくさくて使いづらくても、江戸時代の職人になりきって使い続けるんです。ま、もともとそういう昔ながらのものが好きなんですわね」

修復の過程で、漆塗りの下地の材料そのものは変えられないが、比率を工夫して長く持たせることに成功した、という談話を前編で紹介した。しかしそれも実はかつての技法をなぞったに過ぎないことがあとからわかった。

「最初は自分でもうまいこといったな、と思ってたんですよ。でもよくよく分析したら、昔の職人も同じようなことを試してた。新たな方法を自分で発見したと思ったんだけど、人間、時代は違っても考えることは同じだな、と」

「結局、昔から何百年も続けられてきた方法が理にかなってる。今の方法よりいいやり方を探ってたら、最終的に江戸時代の方法に行き着いたりとか。工期の関係で無理矢理乾く速度を上げたつもりでも、漆の方が本来のペースで乾いてこっちの都合に合わせてくれてるだけで、人間が自然を超えることはできないんだよね」

になって『自分で勉強してないと教えることもできない』ってことに気づいたんです」

佐藤が若手を育成する時のコツは、必ず「先輩と後輩を二人一組にする」ということ。

「後輩にあれこれ聞かれた先輩が、もし答えられなければ自分で勉強するか、聞きに来るか。いずれにせよ、そうすることで二人とも一緒に勉強しながら伸びる。私が一人ひとりに同じことを教えて回るよりずっといいし、この組み合わせなら教え方の勉強になって覚えも早くなる」

また、研究熱心な佐藤ならではの修練法が、建物の修復とは別に漆器の塗りも手がけること。

「細かい作業をできる人が、大きな建物の漆塗りをやる。その方が細部に対するこだわりも思いも違ってくるし、これだけのお客さんに見られても恥ずかしくないものにしなきゃって思う。だからそういう勉強もしてます」

「若い人も好きでこの道に入っただけあって、親方の私の言いなりじゃなくて、ちゃんと自分なりに方法を考えたり解釈したりしてやってますね。そういう人には私も余計なこと言わず、ある程度任せてやるようにしてます」

### 「漆塗り」への尽きない思い

「漆塗りっていうのは、一つのメッセージなんです。最初に込められたメッセージと、後